



特集

お釈迦様ものがたり ⑦
—集まってきた十大弟子たち— その2



これまでお話しましたように、お釈迦様の説法はわかりやすく、弟子たちがどんどん増えていきました。なかでも特に優れた十人の弟子がいました。それを「お釈迦様の十大弟子」と言います。今回は五人の弟子たちをご紹介します。今回は残りの五人のお話です。



プールナ (富楼那)

プールナの母親は、お釈迦様の初めての説法を聞いて覚者となったコナン・ダンニヤの妹です。仏法の道理を理解させることでは右に出る者がなく、「説

法第一」と呼ばれました。シャーンリブトラの質問に答えて、七清浄（涅槃にいたる七つの段階）を説いたとされま

カーティヤヤーナ (迦旃延)

お釈迦様の教えをわかりやすく説くことにすぐれており、「広説第一」「論

No. 14
2005 Spring

山松舎
寺南臨

議第一」と呼ばれました。インド中部のバラモン（司祭）の出身で、辺境の地で布教にあたっていたため、さまざまな障害を乗り越えなければなりません

ウパーリ (優波離)

最下層階級のシユードラ（奴隷）の出身で理髪師でしたが、釈迦族の王子たちが出家するのに先駆けて仏弟子となりました。戒律に詳しく、「持律第一」といわれました。お釈迦様の入滅後、弟子たちが集まって行った第一回仏典

ラーフラ (羅睺羅)

お釈迦様の一人息子です。この子が誕生したとき、お釈迦様は「ラーフラ（障害の意味）」とつぶやいたといわれ、それがそのまま名前として付けられました。ラーフラが出家すると聞いた祖父の浄飯王は嘆き悲しんだといいますが、お釈迦様の実子でしたが、おごることなく、戒律をよく守ったため、「密行第一」と呼ばれました。

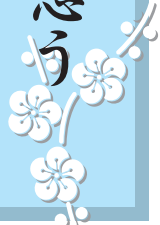
アーナンダ (阿難)

お釈迦様のいとこにあたります。お釈迦様に四十年も仕え、お釈迦様の説法を誰よりも多く聞いたので「多聞第一」といわれます。人々の世話に追われ、お釈迦様の入滅後も悟りを開くことができませんでした。しかし、第一回仏典結集が開かれるというその朝ついに悟りを開き、お釈迦様の教えをまとめる大任を果たすことができました。



弟子たちの出身はさまざまで、カーストなどにしぼられず平等でした。お釈迦様はすべての人に門戸を開いていたのです。でも、女性についてはどうだったのでしょうか？ それは次号ということにいたしましょう。

お彼岸に想う



「彼岸^{ひがん}」とは向こう岸の意味で、お釈迦様の教えに導かれて安らかな生活を送ることができる理想の世界をいいます。これに対して、いろいろな欲望や迷い、苦しみの多いこの世を「此岸^{しがん}」といえます。

お彼岸は、此岸から彼岸に渡るための修行期間です。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われますが、一年中で最も修行のしやすい季節が選ばれて、一年に二回お彼岸をするようになったのです。

彼岸は、お釈迦様の教えを忠実に実行することです。ご先祖様に感謝を捧げ、生きとし生けるすべての人々への限りない慈しみの心で生きる期間です。えてして自己中心にものを考え、行動する自分を見つめ直す、何よりの機会ではないでしょうか。親が信仰の手本を、子や孫に示すよい機会でもあります。

臨南寺では、三月二十三日（水）午後一時から、春彼岸会法要を修業いたします。当日は平日にあたります。ご都合の悪い方は、事前にご回向をお受けできますので、お問い合わせください。みなさまのお参りをお待ちいたしております。

本堂の柱に懸かっている言葉

本堂に入ってすぐある左右二本の柱に、漢文が懸かっています。そこにはどんなことが書かれているのでしょうか。お彼岸のときに本堂を開けておりますので、お参りになったときにご覧ください。

藕絲孔中蔵八萬獅子坐

藕絲孔中^{くわしこうちゆう}に八萬の獅子座^{ししざ}を蔵す

藕絲とは、蓮根を折ると出る糸のこと。

獅子座とは、仏陀の座席。お釈迦様を人間の中の百獣の王、獅子にたとえたもの。

（大意）蓮の糸引く穴の中にも、八万ものたくさんのみ仏の台座があります。

乾屎獮上現三千菩薩身

乾屎獮^{かんしけん}上に三千菩薩の身^みを現^{げん}す

乾屎獮とは、糞が杭のように高く盛りあがって乾燥している様子。何の役にも立たないもの、不浄なもののとたとえ。『無門関』に「仏とは何か」と問われて「乾屎獮」と答えたとあります。

三千菩薩とは、過去世・現在世・未来世の三劫に出現する三千の仏様。

（大意）乾いた糞のように不浄なものにも、過去・現在・未来にわたる三千のみ仏がおわします。

全体として、道元禅師の「悉有仏性^{しつうぶつしやう}」あらゆるものがそのまま仏性である」に通じる言葉と言えるでしょう。

臨南寺百景

ご神木の由来

かつてこの地には、「臨南の森」という広大な森が広がっていました。うかつに入ると迷ってしまうほど、深い森であったといえます。

なかでも樹齢七百年という椎の大木が、ひととき大きな枝を広げていました。この樹には白蛇が棲んでおり、万代池の白蛇と夫婦であったとも、兄弟であったともいわれています。時折ふたつの精が臨南の森を仲良く散歩する姿を見掛けたと伝えられています。

その樹も昭和二十五年のジェーン台風で倒れてしまい、かつての堂々たる姿を忍ばせる幹の一部を残すのみとなりました。その幹はいまも白蛇の宿るご神木として信仰を集めています。



お子さんやお孫さんと ご一緒にお参りを

この数年、宗教離れ、仏教離れという言葉をよく耳にします。この問題について、私の経験から少しお話をしたいと思います。

私は、小学校に入学する前から、お彼岸やお盆などには、父親に半ば強制的にお墓参りに連れて行かれました。また、毎朝仏壇に手を合わせるように言われたのを覚えています。意味などはまったくわかりませんでした。叱られるのがいやで従っていませんでした。

いま振り返ってみますと、そういう経験のなかで、宗教的な感覚が自然に身に付いていることに気がつきます。幼い頃から積み重ねが大事ではないかと思えます。



臨南寺 住職 大澤正道

ることができるとは、ご先祖様に感謝を捧げることが、今後につながるのではないのでしょうか。私たち宗教者にできることは限られているような気がします。日本では信教の自由が保証されており、強制することはできません。子どもの頃から各家庭で日常生活のなかで身に付けていくことが大切です。

皆様も、仏壇に手を合わせる時やお墓参りをするときには、お子さんやお孫さんも一緒に誘っていただきたいと思えます。もうすぐお彼岸です。お彼岸にはぜひご一緒にお参りください。

お彼岸に写経を なさいませんか？

お彼岸写経会

臨南寺では、三月十七日(木)～二十日(火)のお彼岸期間中、午前十時から午後四時までお写経していただけます。一文字書くたびに仏様一体を刻むといわれる写経は、亡くなられた方のご冥福を祈り、功德と浄福を授かります。

書き上げられたお写経は大本山總持寺に納経させていただきます。随時、受付しておりますので、お気軽にお申し付けください。



マトリ合同法要「若葉祭」

五月八日(日)午後一時から、マトリ合同法要「若葉祭」を行います。本堂で法話をお聞きいただいた後、マトリに移り、読経がつづくなか焼香を行っていただきます。マトリ会員でない方も参加していただけます。関心のある方はこの機会にご参加ください。

臨南寺行事予定(三～五月)

□ 本堂ご開扉

三月十七日(木)～二十日(火)
午前九時～午後三時

本堂を開放いたします。ご焼香の用意をしておりますので、お参りください。

□ お彼岸写経会

三月十七日(木)～二十日(火)
午前十時～午後四時(随時)

亡くなられた方を偲びながら写経をなさいませんか？

□ 春彼岸会法要

三月二十三日(水)午後一時～三時
(受付は二時三十分まで)

亡くなられた方にお経をあげ、先祖供養の法要を行います。

□ マトリ合同法要「若葉祭」

五月八日(日)午後一時～三時

読経や焼香、法話など、法要を機に皆様の親交を深めていただければ幸いです。



「感謝」の二文字



すけがわ 勝善 祐川

私は臨南寺でお手伝いさせていたできております祐川勝善と申します。

世の中には、さまざまな宗教、宗派が混在しております。その教えや作法もさまざまですが、その根底に共通しているのは「感謝」ではないでしょうか。ご先祖様あつての自分、周りの人々に支えられての自分、そうして生かされている自分に気付き、日々「感謝」の気持ちで生きて行くことができたなら、どれだけ素晴らしいことでしょうか。

先日、実家の祖父が八十九歳をもって亡くなりました。人柄のよい地域の方々から慕われる、すばらしい和尚でした。そんな祖父も病には勝てず、家族が見守る中で、静かに息を引き取りました。

祖母が涙を流しながら、「おじいちゃん、今までありがとう、ありがとう」と何度も繰り返す姿を見て、私も涙が止まりませんでした。

私も手を合わせ、「じいちゃん、ありがとう」と心の中で何度も言い続けました。人が手を合わせる姿は、「ありがとう」という気持ち、「感謝」の二文字

であることに、祖父の死を通して改めて気付かされました。

私も、先祖に、家族に、今こうして臨南寺でいたただいたご縁に、そして「じいちゃん」に、「感謝」して日々を過ごしていきたいと思えます。

恒例の弁天様祈禱会

一月十五日（木）

今年も正月十五日、厄を払い福を招く弁天様祈禱会が本堂で開かれました。住職による『大般若経（理趣分）』の転読が行われたあと、参詣の皆様が無病息災・延命長寿を祈念してお加持が修され、恒例の甘酒がふるまわれました。

早朝坐禅会に参加して

何も考えず「無」になる 澤田博充

父の墓がご縁で、臨南寺さんにお参りさせていただくようになりました。平成十五年二月の「ほくと」8号に早朝坐禅会の案内が載っていたのに興味を持ち、電話予約して、三月に参加体験させていただきました。

年齢とともに、心の悩みの解決や心の安らぎを求めて、お遍路や断食体験などだんだん自分を見つめ直す機会も増えてきました。

坐禅を始めたときは、少しでも悩みや雑念がなくなるようにと望んでいましたが、実際に坐禅させていただと、実はそれらがなくなるのではなく、何も考えず「無」になるものだと今は思っています。昨日テレビで、永平寺の大和尚が百歳を過ぎた今も、毎日写経と坐禅をなさっている姿に感動いたしました。よいご縁ができ、これからも少しでも修行させていただけることに感謝しています。

お気軽にどうぞ

早朝坐禅会

第一土曜日 午前六時三十分
* 一月・七月・八月は中止します。

写経会

毎月二十日 午前十時〜午後四時
随時受付
写経料／二〇〇〇円

子ども空手教室

毎週木曜日 午後七時〜九時
一カ月／六〇〇〇円

※いずれも事前のお申込みが必要です。



「ほ〜と」14号

平成17年3月

編集・発行：稜伽林「ほ〜と」編集室

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-32

☎ 0120-711-493

TEL 06-6698-1001 FAX 06-6697-3330

Eメール：rinnanji@abeam.ocn.ne.jp

ホームページ：http://www.rinnanji.com

編集後記

お通夜やお葬式には、必ず子どもを連れて行くという知り合いの方がいます。お子さんたちが幼い頃からずっと続けています。「死」ということ、「命」ということ、それを具体的に見せておくのだとおっしゃっています。今回の内容はいかがでしょうか。ご感想をお寄せください。採用分には粗品を送らせていただきます。FAXでも結構です。